

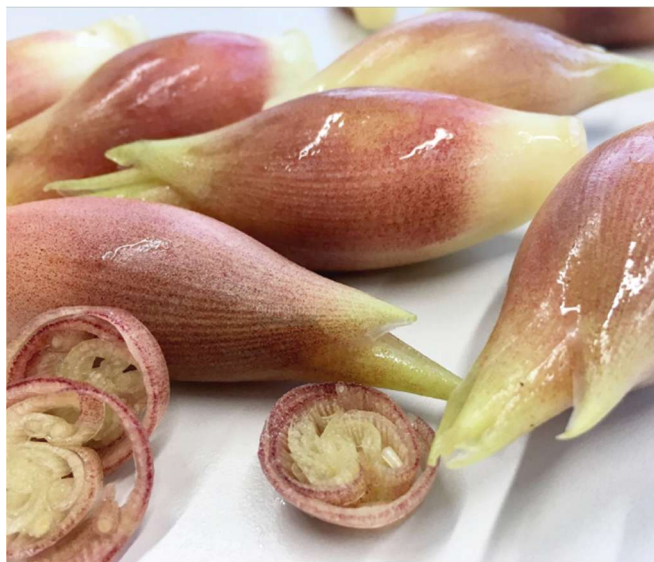
館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 6 月 13 日(金)

発行 館長 加 藤 智 一

茗荷(ミョウガ)を食べると物忘れする？



落語「茗荷宿」。東海道の神奈川宿に茗荷屋という代々繁盛した料理屋がありました。当代の亭主は道楽者で、身上を潰してしまい仕方なく宿場のはずれに小さな宿屋を出しましたが、客あしらいも悪く、家も汚くなり泊まる者もいなくなる有様です。亭主夫婦は宿をたたんで、江戸に出て一から出直そうと決めたある夜更けに、年配の商人風の旅の男が一晩泊めてくれと入って来ます。男は商用の百両が入っているという荷物を預け、すぐにぐっすり寝入ってしまいます。百両に目がくらんだ亭主は台所から出刃包丁を取り出し客間に向かいますが、女房に気づかれ、浅はかなことと思いとどまります。だが女房も喉から手が出るほど百両が欲しい。そこで妙案が思い浮かびました。宿の裏にごっそり生えている茗荷(ミョウガ)を刈って客の男に食べさせるのです。茗荷は物忘れをさせるという代物。客に茗荷ばかり食べさせ、預けた荷物のことなど忘れさせてしまおうという算段です。翌朝、ぐっすり寝て気分よく起きてきた男に、宿の女房は「今日は先祖の命日で、茗荷を食べる慣わしになっています」と、茗荷茶、茗荷の炊き込みご飯、茗荷の味噌汁、茗荷の酢の物など茗荷づくしを膳に並べます。男は「美味しい、美味しい」と茗荷をたらふく食べ、満足して預けた荷物も忘れて宿を立ててしまいました。宿屋夫婦はまんまと計略が成功し、百両が手に入ると大喜びも束の間、男はすぐに戻って来て預けた荷物を持って

行ってしまいました。糠喜びでがっかりした夫婦。ところがしばらくして女房が気づきます。「ああ!宿賃の払いを忘れていった。」ふんだり蹴ったり・・・と思いきや、茗荷をたらふく食べて大満足の商人は、方々で言いふらします。それが評判になり、宿には茗荷目当てのお客がわんさか。宿は大繁盛となりました。めでたしめでたし。

俗説ではありますが、「茗荷＝物忘れがひどくなる」という迷信が生まれたのは、周梨槃特という名の仏僧の逸話に関係しているという説があります。周梨槃特は釈迦の弟子の一人ですが、物忘れがひどいことで有名でした。それは自分自身の名前さえ忘れてしまうほどで、名前を書いた札を首からぶら下げても、それすら忘れてしまうほどだったといひます。その周梨槃特がこの世を去った後、埋葬された墓に草が生えました。人々はその草が周梨槃特の名を荷なって生えてきたとして、「名を荷なう草」という語呂合わせからミョウガ(茗荷)と命名したそうなのですが、周梨槃特はインドの人物で、日本語の語呂合わせから生まれたというのはどうもうさん臭い話。私たちの先祖は、茗荷は身体を冷やす効果があることから、食べすぎでお腹を壊すことを戒めるために、この話を創作したのかもしれない。

私的に最も有力と思われる説は、中国大陸からショウガとともに持ち込まれた際、香りの強い方を「兄香(せのか)」、弱い方を「妹香(めのか)」と呼び、これが後にショウガ・ミョウガに転訛しましたというものですが、みなさんはどう思いますか。ただ、茗荷はショウガと違って根茎部は食べないので、その辺どう解釈すべきなのか私にはわからない。

